

Title	哲学史と経済学
Sub Title	The history of philosophy and economics
Author	伊藤, 邦武(Ito, Kunitake)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.103, No.1 (2010. 4) ,p.5- 23
JaLC DOI	10.14991/001.20100401-0005
Abstract	<p>高橋誠一郎先生は名著『経済学前史』その他の業績において、西洋における哲学史と経済学との密接な関係を理解することから、「経済学は、再びエコノミクスからポリチカル・エコノミーに赴かなければならぬ」ことを学びうる、と述べられている。本論では高橋先生のこの主張の正当性が、ケインズにおけるその確率思想への哲学的知識の影響と、ラスキンにおける経済学批判への古代哲学の影響を検討することで、改めて浮き彫りになることを論じる。</p> <p>In his famous book "Keizaigaku Zenshi" and through other achievements, Professor Seiichiro Takahashi argues that from understanding the close relationship between the history of philosophy and economics in the West, one can learn that "economics must once again go from economics toward the direction of political economy."</p> <p>This study argues that the legitimacy of Professor Takahashi's claim is once again revealed by a review of the influence of knowledge as defined by the history of philosophy in his ideas on probability by Keynes and the influence of ancient philosophy in the criticism of economics by Ruskin.</p>
Notes	特集：経済学のエピメーテウス
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20100401-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

哲学史と経済学

The History of Philosophy and Economics

伊藤 邦武(Kunitake Ito)

高橋誠一郎先生は名著『経済学前史』その他の業績において、西洋における哲学史と経済学との密接な関係を理解することから、「経済学は、再びエコノミックスからポリチカル・エコノミーに赴かなければならぬ」ことを学びうる、と述べられている。本論では高橋先生のこの主張の正当性が、ケインズにおけるその確率思想への哲学的知識の影響と、ラスキンにおける経済学批判への古代哲学の影響を検討することで、改めて浮き彫りになることを論じる。

Abstract

In his famous book “Keizaigaku Zenshi” and through other achievements, Professor Seiichiro Takahashi argues that from understanding the close relationship between the history of philosophy and economics in the West, one can learn that “economics must once again go from economics toward the direction of political economy.” This study argues that the legitimacy of Professor Takahashi’s claim is once again revealed by a review of the influence of knowledge as defined by the history of philosophy in his ideas on probability by Keynes and the influence of ancient philosophy in the criticism of economics by Ruskin.

哲学史と経済学

伊 藤 邦 武

要 旨

高橋誠一郎先生は名著『経済学前史』その他の業績において、西洋における哲学史と経済学との密接な関係を理解することから、「経済学は、再びエコノミックスからポリチカル・エコノミーに赴かなければならぬ」ことを学びうる、と述べられている。本論では高橋先生のこの主張の正当性が、ケインズにおけるその確率思想への哲学史的知識の影響と、ラスキンにおける経済学批判への古代哲学の影響を検討することで、改めて浮き彫りになることを論じる。

キーワード

ケインズ, ラスキン, プラトン, 確率論, 多元論

一 哲学史と経済学

哲学史と経済学は今日の大学などでの学問の分野としてはかなりかけ離れているが、実際には非常に密接な関係をもっている。このことは、経済学の歴史に登場する代表的理論家の少なからぬ者が同時に卓越した哲学者でもあったという事実を見れば、改めて指摘するまでもない自明のことである（例えば、アダム・スミス、カール・マルクス、ジョン・ステュアート・ミル、スタンリー・ジェボンズ、ジョン・メイナード・ケインズなど）。あるいは経済理論が哲学史の大きな柱である社会哲学、政治哲学の重要な一要素であることを考えれば、哲学史と経済学の密接な交流がない状態はむしろ不自然な状況である。ところが、これらの分野の密接な関係について詳しい分析を行った本格的な成果は、これまで我が国のみならず欧米においても不思議なくらい少なかった。そうしたなかであって、高橋誠一郎先生の業績はその数少ない先駆的な例外であり、しかも現在なお綿密な参照に値するきわめて貴重な成果であるといえよう。

とくに『経済学史』や『経済学前史』などに代表される高橋先生の著作は、経済学の研究者にとって根本的な資料としての役割をもっているばかりではなく、思想史、哲学史の専門家にとっても十分に活用すべき貴重な知見に充ちた作品である。しかし、経済学史のなかに哲学への豊かな脈を読み込もうというこの発想は、私が専門にしている分析的哲学や哲学史の世界でも、これまでまっ

たく周辺の少数派の意見に留まっていた、広く学界の研究者たちに共有されるような一般的了解事項とはなっていない。ここでは、こうした哲学史と経済学の密接な関係にたいする無関心を少しでも改め、その豊かな可能性の脈をさらに発展させるための端緒ないしヒントを示すために、この二つの学問分野の交差点に生まれた知的洞察の具体的な事例を二件挙げてみたいと考える。本論の事例研究的記述はあくまでも私個人の関心に入る範囲で、しかも限られた知識で論及できる主題での、二つのトピックスについての簡単な概説にすぎない。私個人としてはひそかに、これだけでも、単なる歴史的トリヴィアの発掘という興味に留まるだけでなく、さらに「哲学史と経済学」という交差点に注目することで浮き彫りになる一つの問題意識についての、再考ないし反省というものを促す機縁になるのではないかとも思うのである。

以下に挙げる具体的事例の一つは、ケインズにおける哲学の活用ということで、これは主として初期の作品『確率論』におけるこれまでほとんど注目されてこなかった、彼の哲学史の知識と、その知識がもたらした経済学への理論的含意についてである。ケインズはその哲学的師ともいべきヒュームやラッセル理論の吸収によって、新しい確率の概念体系を構築しようとしたが、その「新しさ」には今なお学ぶところがあるようである。そして、事例研究のもう一つは、ケインズよりも前のイギリスの特異な経済思想家ジョン・ラスキンの経済学批判における、ミルと古代ギリシア思想家たち、とくにクセノポンやプラトンとの対比ということについてである。ラスキンは当時勃興した科学としての経済学にかなり対立した見方をして、古代の思想によってミルなどの経済学を批判するという奇妙な態度を採用した。しかしその時代錯誤ともいべき発想が、今日では先端的経済思想ともいべき立場の萌芽を宿していたと考えられる。

これら二つのトピックスは、どちらもイギリスを舞台にしたもので、時代的にもそれほどかけ離れてはいないが、表面的に見れば必ずしも非常に密接に関連した主題であるとはいえない。しかしながら、どちらもある種の社会思想、人間論に立脚した経済学批判を内包していて、いわゆる資本主義の内在的な危険性にたいする鋭い意識をもっていたという点、そして、哲学的にはプラトン主義に立脚して、ヒュームやミルなどの実証主義的方法論にたいする強い批判的傾向を示した点など、二人の間にいくつかの共通点があることは確かであろう。このプラトン主義の擁護という問題は、高橋先生の著作とも直接にかかわっている。というのは、先生の『アリストテレス』『経済学前史』における主要なテーマは、アリストテレスによるプラトンの国家論批判のなかに、社会、経済思想の重要な成果を認めるというものであり、その意味で本論に登場する二人は（少なくとも青年時代のケインズについていえば）、共にアリストテレスよりはプラトンを重視したというかぎりでは、ある意味では高橋先生への批判的議論を提供しているともいえるからである。

とはいえ、プラトン主義の是非という問題はあくまでも小さな問題である。より重要なのは、二人の思想家の間の共通点の前者のほう、すなわちその社会思想、人間論に立脚した経済学批判のほうにある。彼らは人間の「合理性」の平板な解釈を批判したり、その一次元的平板化という方法論

そのものに批判を加えることで、共に古典的経済学の代表的思想家たちが暗黙に採用してきた、いわゆる自由放任主義、レッセフェールへの強い批判的姿勢をもっていた。そして、この点では、高橋先生の基本的視座もまた、科学的、実証主義的経済思想が採用するレッセフェールの盲目的信頼への批判を共有していたのではないかと思われる。なぜなら高橋先生は、『経済思想史随筆』所収の「ポリチカル・エコノミー」において、「ポリチカル・エコノミーからエコノミックスに変じた経済学は、再びエコノミックスからポリチカル・エコノミーに赴かなければならぬ。そは『凡そ天下国家を治むるを経済と云ふ、世を経め、民を済ふと云ふ義なり』と説かれた我が漢学者流の経済学と或る程度まで一致するものと為る」と書かれているが（高橋 1940, p. 87）、ここでいわれる「ポリチカル・エコノミー」には、哲学や倫理学を基礎においた治世学という意味が込められており、それこそが、「レッセフェールの終焉」を説いたケインズや、「エコノミック・マン」という概念の批判を展開したラスキンが希求した、経済学の真の姿であったのではないかと思われるからである。いずれにしても、哲学史と経済学の交差点に注目することで、忘れられた歴史の片隅を瞥見すると同時に、「再びエコノミックスからポリチカル・エコノミーに赴く」必要があるのではないか、という問題意識にも多少の光を当ててみたい、というのがこの小論のささやかなねらいである。

二 ケインズ

さて、二〇世紀最大の経済学者ケインズが、その理論形成においても、その代表的理論の中核においても、哲学と非常に密接な関係をもっていたことは、よく知られているとおりである。とりわけ彼の処女作『確率論』は、もともとケインズがケンブリッジのキングスカレッジのフェローに応募するために構想された作品であるが、この作品には彼の最初の師であるムーアの倫理思想が下敷きにした、「頻度説」にもとづく確率論にたいする批判的克服という動機が込められている。そればかりでなく、その体系化の過程で、ホワイトヘッド、ラッセル、ジョンソンら当時のケンブリッジの代表的な論理学者、哲学者の指導が入っており、さらには、その扱う思想家にもアリストテレス、ベイコン、カント、ヴォルフへの言及など、非常に網羅的な思想史的記述に充ちているという意味で、とりわけ哲学的な著作であるといえよう。われわれは彼の思想史的知識の源泉となったものとして、一九世紀を代表する確率論の歴史の研究であるトドハンターの浩瀚な『確率の数学理論の歴史—パスカルの時代からラプラスの時代まで—』（1865年）などを挙げることができるが、ケインズはこの作品を下敷きにして、パスカル、ダランベール、コンドルセ、ラプラス、ド・モワブル、クルノーなどの批判的分析を展開したものと推定される。また『確率論』にはそれ以外にも、ヒュームにかんする詳しい検討が盛られていることはいまでもなく、さらにはフェヒナーやパース、ジェイムズといった、限られたサークル以外ではほとんど知られていなかった一九世紀のもっとも独創的な「非決定論」の哲学者の思想に言及しているところが注目される。とはいえ、このきわめて多

岐にわたる哲学的知識を満載した著作において、何よりも印象的なのは、ヒュームなどのイギリス思想とは異種的な、スピノザとライプニッツという一七世紀の大陸合理論の哲学思想が、この確率論の体系の根幹となっている「論理主義」という発想を説明する際にもっとも積極的に利用されているという点である。

われわれはこれまでのケインズ研究においてあまり言及されることのなかった、彼のこの大陸の哲学者たちのユニークな応用に改めて注目することで、ラッセルからの強い影響のもとに独自の体系化を図ったケインズの独創性を垣間見ることができる。しかもその独創性は、単に論理的な洗練という視点を超えて、後の国際的な政治経済学者としての彼の行動に通じるような、重要な論点を内包していたことに気づかされるのである。

『確率論』におけるケインズの最大の目標は、それまでの実証主義的科学観と密接に結びついた、確率にかんする「頻度説」を批判して、プラトン主義的な認識論にもとづく「論理主義」という立場を提唱することにあつた。この書物の実際の内容は、その大部な体裁のゆえにかなり多岐にわたっていて、全体を一まとまりのものとして理解することはそれほど容易なことではないが、とりあえず一般に彼の確率にかんするテーゼとして認められている主要命題を箇条書きにしておけば、次のようになる。

- (1) 演繹的論理学や純粋数学のような形式的学問を除くと、すべての科学は、物理学、形而上学、倫理学を含めて、その結論が百パーセント確実とはいえない議論、不確実な結論からなる議論を採用せざるをえない。したがって、人間の科学的探究一般の哲学的分析のためには、まず「蓋然性」つまり「確率」の研究が先行しなければならない。
- (2) ここでいう確率とは、自然のうちなる物理的事象に帰せられる性質ではない。それは、われわれの推論について問われる性質である。ある前提からはいかなる蓋然性をもってある結論が導きうるのか。確率とは前提と結論との結びつきの確かさのことである。
- (3) 確率という概念はこのように推論に帰せられる性質であるから、その形式は関係的であり、相対的である。前提を認めたら、どの程度の蓋然性をもって結論を認めてもよいか、という関係的な概念が確率である。
- (4) 推論に帰せられる確実性、あるいは推論がもつ確実性は、結論の真理を判定しているのではなく、推論の「合理性」を判定している。確実性は物理的性質ではないが、主観的感じでもない。合理性は、主観的感じ以上の客観性を主張できる。
- (5) ある推論における前提から結論の導出にかんする合理性の度合い、としての確率が単なる感じに留まらない理由は、われわれがこの度合いを「直接に知覚」できるからである。われわれは、ある「知識」(前提)からある「信念」(結論)への導出が、どの程度に確実なものであり、どの程度に合理的であるのかを、直接に「見て取る」ことができる。
- (6) われわれが見て取るこの「合理性の程度」としての確実性、確率、蓋然性は、他の概念によつ

ては定義できないプリミティブな概念である。それは「真理」などと同等に基礎的な論理的概念である。

- (7) 合理性の「程度」、确实性の「程度」は、基本的に大小関係ではあるものの、必ずしも数量化が可能であるとは限らない。それは比較にかかわることは確かであるが、算術的な処理を受けられる数値であるかどうかは場合による。
- (8) 確率の程度の種類はしたがって、一種類ではない。大小関係にかかわるシリーズには多様なタイプがありうる。厳密に数的大小関係にあるシリーズから、質的な程度、たとえば質的な強弱のように、数値によっては表現できないシリーズまで、さまざまなものがある。そしてシリーズどうしの相互連関も存在する。
- (9) 個々の推論には、前提から結論への導出の確かさという意味での確率のほかに、もう一つ別の確かさがかかっている。それは前提そのものの確かさである。厳密に言えば、前提は知識である以上、すべて确实なものとして想定されている。とはいえ、さまざまな知識には、それがこれまでの探究の歴史のなかで、どの程度まで吟味に耐えてきたか、という区別がある。言い換えれば、前提にかかわる証拠の「重み」という問題がある。証拠の重みは「議論の重み」を形成する。推論がどの程度の重みをもった議論となっているかということは、その推論がどの程度の確率をもつかという問題とは別個の問題である。

さて、ケインズの確率論の主要なテーゼは以上のような九つの主張にまとめられるが、一瞥しても分かるようにこの理論のもっとも基本的な発想は、確率とは命題間の関係にかかわる「論理的概念」であるということである。彼はケンブリッジの学生時代、ムーアの『プリンキピア・エティカ』に心酔しつつ、そこに含まれた「将来の行動の予測の不可能性」という立場に失望し、その重大な理論的欠陥の根本には、確率についての頻度説という誤った哲学があると考えようになった。その結果として彼は、後のカルナップの理論（の一部）とも重なるような、「確率にかんする論理説」あるいは「論理主義」と呼ばれる別の理論体系を構築する必要があると考えたのである。「論理主義 (logicism)」というのはラッセルがフレーゲとともに数学の基礎づけにかんして採用した立場であるが、ケインズはこのラッセルの論理思想を拡大して、演繹的推論以外の推論、とくに帰納的推論にかんしても論理主義が成立すると考えて、そのための道具立てとして確率の論理説を提唱し、その形式的体系化を図ろうとした。そして、ちょうどラッセルにおいては、演繹的推論における命題間の論理的関係は客観的であると同時に、直観的に把握可能なものとされていたように、ケインズは命題間の「部分的含意」の関係も客観的であり、直観可能な関係であると解釈した。「確率論は論理的な理論である。なぜなら、それは所与の条件下で享受することが『合理的』であるような信念の度合いに関わるのであり、合理的であるか否かが不確定な、単なる個々の個人の現実の信念に関わるのではないからである」(Keynes 1921, p. 4)⁽¹⁾。

『確率論』本来の立場は、このように確率あるいは「合理性の度合い」というものを命題間の関係

が有する論理的性質と考える、論理説ないし論理主義であり、このプラトン主義的直観の理論の採用において、ラッセルの数学の基礎づけにかんする論理主義と共通の認識論に立っている。それはただ命題間の論理的関係を演繹的推論よりも広い範囲に適用し、帰納的推論にかんしても命題間の演繹的関係に類比的な関係を打ち立てようとしたものであり、この点は『確率論』のテキストでもケインズ自身がはっきりと言明していることである（蛇足ながら付け加えると、ラッセルの哲学はしばしば漠然とヒュームやミルに代表されるイギリス経験論の系譜に立つものとみなされることがあるが、これはまったくの誤解であり、彼の認識論は基本的に一貫してプラトン主義の系譜に立っている。彼の名づけ親はたしかにミルであったが、哲学者としてのラッセルがいわゆる「経験論」という立場に好意的な考えをもつようになったのは、そのもっとも後期においてのみである）。

しかしながら、もう少し細部にこだわって厳密なことをいうと、同じ論理主義という思想を標榜しながらも、ラッセルの立場とケインズの立場は実際には正確に相似的なものではない。この相違を簡単にいえば、ラッセルでは命題どうしの「含意 (implication)」を問題にしているのにたいして、ケインズが注目しているのは、多数の命題からなる「グループ」ないし「集合」を前提にした場合に、ある命題が別の命題から必然的に「推論 (inference)」されるか、部分的に推論されるか、などの問題であり、この推論関係はラッセルのいう論理的含意とは別の発想を背景にしているのである。というのも、ラッセルの含意はある普遍的に妥当な論理的公理系を想定した場合の、命題どうしの無矛盾な関係であるのにたいして、ケインズが注目するのは命題の集合として特定できる「知識」と、その中に含まれない蓋然的な「信念」との関係であるからである。

ケインズ自身もこの相違について、テキストのなかで短くではあるが注意を促している。ケインズはそこでは、自分の「必然性」「蓋然性」などの概念が、もともとスピノザの『エティカ』の用語法を踏襲したものであると書いているが、それは上に挙げたテーゼの (3)、前提となる知識に相対的に理解される帰結のもつ合理性の度合い、という意味での「確率」ないし「蓋然性」という思想である。彼は『エティカ』の第一卷定理三三や第四卷定義三、四などを挙げて、この思想の正当性を訴えているが (Keynes, op. cit., pp. 116, 282)、テーゼ (3) は彼の確率論の根幹にある発想である以上、その確率論の体系にはラプラスよりさらに古い古典的合理論の哲学が大きな影をおとしているということになる。

ところで、ケインズがその論理主義を展開するために、基本的にはラッセルの数学の基礎づけの哲学を利用しつつ、実際にはさらに視野を拡げて、一七世紀の合理主義の哲学にまで依拠してその哲学を構想しようとしたというこの事実は、これまであまり注目されてこなかったようである。果たして彼はどのようなルートを通过这个の種の哲学に接近することになったのか。もちろん、デカ

(1) 『確率論』におけるケインズの確率概念のより詳しい内容と、それが形成された哲学的背景にかんしては、拙著 (伊藤 1999) を参照されたい。以下に出てくるラッセルとクーチュラのライブニッツ研究は、Russell 1900 と Couturat 1901 である。

ルトの「アニマル・スピリット」という概念の『一般理論』への導入などについては、すでに多くの指摘がなされている以上、彼の哲学史の知識の源泉については、彼の大学時代のノートの研究などによって今後もさらに明らかにされることであろう。いずれにしても、この古典的合理主義の哲学についてのケインズの興味が単なるトリヴィアルな問題に留まらないことは、スピノザと並ぶもう一人の哲学者ライプニッツとの関係を考えるときには、より一層明らかになると思われる。なぜなら、それは彼に対するラッセルからの影響の幅広さに気づかせると同時に、ケインズとライプニッツという、歴史上もっとも優れた知性の持ち主にかんして、その知性主義の「奥行き」ということを再考させるきっかけを与えると思われるからである（周知のように、二〇世紀を代表する論理学者・哲学者ラッセルがその自伝において、「ケインズと話すとは常に知的に劣っているという劣等感に襲われる」と語っている一方で、ライプニッツについては「人類の歴史を通じてもっとも素晴らしい知性」と形容していることは、単なる偶然ではないであろう）。

『確率論』を手にとって開けば誰でも気づくように、この本の「序文」の冒頭には、「この本の主題となる事柄は、ライプニッツが二三歳の折にポーランド王の選出の仕方について論考を書いた際に、確率を論理学の一分野として構想したことで、初めて彼の精神のなかに生まれた主題である」と述べられている。そして、第一部第一章の冒頭には、そのエピグラムとして、「私はこれまで幾度も、蓋然性の度合いを扱う新しい種類の論理学がなければならぬと述べてきた——ライプニッツ」と書かれている。したがって、『確率論』は何よりもまず、このライプニッツの「新しい種類の論理学」の形成の試みであることが注意されるべきである。それは間違いなく論理主義の一つの企てであり、しかもスピノザやライプニッツなど、古典的な合理主義の思想家の構想を改めて辿り直そうとした論理主義である。とはいえ、それは同時に「新しい種類の」論理主義である。この新しい論理主義といわれるもののポイントは何なのか——われわれはそれをもう一度問い直すべきところに来ているのではないかと思われる。

ここで改めて考えられるべきなのが、ラッセルによるケインズへのもう一つの影響ということである。ラッセルはケンブリッジでの講義をもとにして、一九〇〇年に『ライプニッツ哲学の批判的解明』を著したが、この著作の出現は、ほぼ時を同じくするフランスの哲学者クーテュラのライプニッツ研究の登場と相まって、それ以前の哲学史に見られたライプニッツの表層的理解を完全に一掃する役割を果たした。それまでのドイツを中心とする哲学史の常識では、ライプニッツはヴォルフと並んで、カント以前の無批判的で、独断的な合理主義の権化とされがちであり、さらにもっと広い文学的な文脈では、ヴォルテールの『カンディード』に登場するバングロス博士のモデルとして、世界最善説の盲目的信奉者のようにカリカチュアされるのが常であった。彼はニュートンにも比肩する科学的、数学的卓越した精神をもちながらも、宮廷づきの哲学者として思弁的で、現状肯定的な楽観論を展開した、理論的にきわめて妥協的な哲学者であると理解されるのがふつうであった。ラッセルはこうしたライプニッツの過小評価が、彼の論理思想への完全な無理解にもとづくも

のであり、それはカント以来のドイツにおける論理哲学の未熟さに起因するものであることを暴きだした。ラッセルによれば、ライプニッツこそがフレーゲや彼自身の演繹的推論にかんする論理主義の真の先駆者であった。

ラッセルによる画期的なライプニッツ研究の成果は、その友人のルイ・クーテュラの包括的研究において支持を受けると同時に、さらに幅広いライプニッツの哲学的関心の意義を人々に意識させることになったが、『確率論』のあちこちに見られる注記からも明らかなように、ケインズのライプニッツ理解はこのクーテュラの研究に大きく依拠している。それは、彼の論理主義において、演繹的推論から非演繹的推論への拡大を可能にしたばかりでなく、『確率論』の思想が強調する「合理性」についての非常に弾力的で、柔軟な視点を可能にするような、ユニークな哲学の基礎を与えることになった。というのも、ライプニッツこそが、たとえば先に挙げた(7)(8)(9)などの、「多元的確率」あるいは複数の異種的確率のシリーズや「論証の重み」のような、複雑かつ新鮮な考えの萌芽を提供したからである。

この点にかんしてまず注目されるのは、『確率論』第一部第三章「確率の計測」の注で書かれている、「ライプニッツは法律顧問官たちによって作られた、さまざまな確率の度合の間の精妙な区別に注目している。……クーテュラの『ライプニッツの論理学』二四〇頁を見よ」という一文である(Keynes, op. cit., p. 24)。ケインズはライプニッツが考案した法律問題にたいする確率論の応用については、テキストの後半でも繰り返しており、次のように書いている。「数学的期待値の概念の優先権は、私が考えるに、ライプニッツの一六七八年の『不確実な評価について』に帰すことができると思われる。彼は一六八七年のプラリウス宛の書翰では、同じ原理を法律問題にも適用することを提案しているが、これは次のような考えである。二人の訴訟関係者が一定の額の財産にかんして争っているときに、一方の主張が他方の主張よりも二倍の蓋然性をもつときには、その割合で総額が分配されるべきである。私はこの思想が適切なものであると考えるが、実際にそれが適用された事例については承知していない」(Keynes, op. cit., p. 311)。

ここで問題になっているのは、チャンスゲームにおいて何らかの事情でゲームが中断された場合に、掛け金はどのように分配されるべきか、というパスカルとシュヴァリエ・ド・メレ以来の問題から発展してきた「数学的期待値」という考えが、ライプニッツにおいて非常に明快な形式化がなされたということ、そして、ライプニッツはこの考えを財産の分配など法律上の係争問題にも適用可能だと主張した、ということである。ケインズはこの発想が「適切」であるにもかかわらず、「それが適用された事例については(何故か)承知していない」と疑問を呈している。この問題は、財産分与の原理としていかなる原理が(法哲学的に見て)合理的か、という大きな問題にかんするものであり、簡単に論じられるものではないが、少なくともゲームにおける将来の分け前の分配と、過去から継承している財産の分配とが、同じ論理で評価できるかどうかは、大いに疑問が残る点である⁽²⁾。

他方、第一部第三章にある注は、次のような本文に付されたものであり、その主旨はテキスト後

半にある今の議論と重なってはいるが、それだけに留まらない幅広い議論になっている。すなわち、「この点に関して哲学者たちよりも精妙な仕方であつてきたもう一組の実験家たちは、法律家である。彼らが設定する、われわれのここでの関心にとって興味深い区別は、ある程度狭い範囲まで測定できる確率と、そうはできない確率との区別であるが、彼らはそれを損害をめぐる法律的判定に際して利用するのである」。この本文に付された注に挙げられているクーテュラが注目しているのは、ライプニッツからベルヌーイその他の数学者への書翰のほかに、『新知性論』四卷一六章（「同意の程度について」）九節であるが、この箇所こそライプニッツが、「私はこれまで幾度も、蓋然性の度合いを扱う新しい種類の論理学がなければならぬと述べてきた」という、先に引用した『確率論』第一部第一章のエピグラムに掲げられた文章を書いた箇所にほかならない。そしてそこでライプニッツは次のように書いている。

「法律家たちは、証明・推定・憶測・状況証拠を扱う際、その主題について多くの有益なことを語り、注目すべき詳細に至りました。……それゆえ証明には、十分である以上の証明があり、また通常の十分な証明もあるのです。次に、推定というものがあり、これは、反対のことが証明されないかぎり暫定的に完全な証明とみなされるものです。半ば十分である以上の証明もあり、これを拠り所とする者には、その不十分さを補うべく宣誓することが許されています。また、半ば十分であるよりも劣る他の証明があり、この場合は逆に、事実を否認する者に対しての身の証しをたてるための宣誓が許可されます。これ以外には、憶測や状況証拠の多くの程度があります。特に刑事訴訟においては、拷問を用いることになるような状況証拠や、拷問の器具を示して拷問にとりかかるつもりであるかのような準備をすることで十分であるような状況証拠があります。容疑者を逮捕するための状況証拠や、こっそりと秘密裡に情報を集めるための状況証拠があります。そして、これらの差異は、他の類似した場合においてもまた役立ちます。裁判における訴訟手続きの形式全体が、実際、法律問題に適用された一種の論理学にほかなりません。医者もまた、症状や症候に多くの程度や差異を認めている、と見ることができます。当代の数学者たちは、賭の機会での偶然を推算することを始めました……」（ライプニッツ 1975, p. 271f）。

引用文はこの後では、パスカルなどの賭の議論の紹介をして、最終的に『確率論』後半で紹介された財産の分配問題における数学的期待値の応用可能性の話に移っていくのであるが、われわれが注目すべきなのは、そうした確率算を応用して創始された数学的意味での「新しい論理学」であるよりも、むしろこの引用に出てきたもう一つ別の「新しい論理学」ではないかと思われる。

ライプニッツは「裁判における訴訟手続きの形式全体が、実際、法律問題に適用された一種の論理学にほかなりません」と書いて、「証明・推定・憶測・状況証拠」という不確実性の概念的ネット

- (2) この主題にかんするライプニッツ、ケインズの立場を批判的に検討したものとして、Rescher 1995 が役に立つ。またライプニッツの哲学思想とパスカルからカルナップに至る西洋の確率思想の歴史との密接な関係については、Hacking 1975 が詳しい。

ワークの「論理」構造について論じている。そしてケインズもこのような発想を下敷きにして、「ライプニッツは法律顧問官たちによって作られた、さまざまな確率の度合の間の精妙な区別に注目している」と述べ、さらには、「この点に関して哲学者たちよりも精妙な仕方であつてきたもう一組の実際家たちは、法律家である。彼らが設定する、われわれのここでの関心にとって興味深い区別は、ある程度狭い範囲まで測定できる確率と、そうはできない確率との区別であるが、彼らはそれを損害をめぐる法律的判定に際して利用するのである」と述べているわけである。

賭けにおいて問われる数学的期待値としての不確実性の処理、訴訟における証明や憶測や状況証拠にかかわる不確実性の論理、医学の領域で認められる「症状や症候に多くの程度や差異」——これらはいずれも等しく不確実性にかかわる合理的な判断の形式であり、その意味で重なり合う面もある諸形式であるが、互いにストレートに還元することは不可能な独立性ももった、複数の「確率のシリーズ」である。ケインズが『確率論』を、「ライプニッツが二三歳の折にポーランド王の選出の仕方について論考を書いた際に、確率を論理学の一分野として構想したことで、初めて彼の精神のなかに生まれた」主題を発展させるべく著わしたのだとすれば、その「論理学」とは元来、このような複数の不確実性の領域を包含するような論理学であったのではないか。このような多元的で柔軟な論理学において、算術的確率にたいする適用の限界ということは、初めから十分に意識されていたはずである。それは『確率論』後半において、とくにラプラス以来の「不十分な理由の原理」ないし「無差別の原理」の無制限の適用が導く矛盾の批判という形で、具体的に展開されるテーマであるが、問題はそうした形式的でテクニカルな困難ということには留まらない。ケインズにとっての算術的不確実性の限界ということは、「蓋然性」「確率」「不確実性」と「合理性」にかかわる根本問題として、初めから主要テーマとなっていたのである。

近年のケインズ研究においてしばしば議論されるのは、彼がその生涯のなかで、確率にかんする解釈をラッセル流の狭い意味での論理主義観点から、『一般理論』の「長期的期待」に組み込まれる間主観的確率のような観点へと移行することになり、その過程で確率概念そのものを変化させたのではないか、という問題であり、また、『一般理論』に代表される後年のケインズが、(『確率論』出版と時を同じくしてシカゴ大学のナイトによって発表された)「リスク」と「不確実性」という重要な区別についても鋭い意識をもつようになったのではないか、というような問題である。これらの議論のなかで指摘されるような事柄はたしかに事実であったと思われるが、別の観点からすれば、論理学にかんするより柔軟な観点の下で、不確実性の多元性という考えの重要性を一貫して保持したケインズの思想、という側面にも光が当てられるべきではないかと思われる。われわれは、不確実性が算術との参照のもとで区別される領域以上に、質的に異なった知的活動において多様に広がる基礎概念であり、その概念地図はきわめて複雑なものであるということを、ケインズが初めから意識していたというべきである。

われわれはまた、精緻な計算的知性、形式的かつ論理的思考にかんする一面的理解ということに

ついても注意すべきかもしれない。ヴォルテールが揶揄するオプティミズムの権化としてのパングロス博士——哲学者ライプニッツにこうした戯画を当てはめれば、「ハーヴェイ・ロードの公準」に軸足を置きつつ世界の無数の不合理の現場で格闘したケインズは、ライプニッツのもっとも対極に位置する思想化であったと特徴づけられても不思議ではないということになる。しかしながら、これくらいライプニッツの実像とかけ離れた描像もない。ライプニッツはラッセルがケインズと等しく恐れたような、最上級に透明な数学的、論理的知性の持ち主であったが、その実際の適用はまったく具体的、多様な現実の世界に根ざした政治、歴史、工学、技術など、地上のあらゆる分野に及んでいた⁽³⁾のであり、その点でラッセルが鋭く見抜いたように、二人は決して無縁な思想家ではなかったのである。

三 ラスキンの

ケインズの次に取り上げるラスキンは、同じイギリスの思想家であるといっても、ケインズより半世紀前の作家であり、その知的背景もまったく異なっている。ケインズがホワイトヘッドやラッセルの哲学の世界に、「モラル・サイエンス」としてのマーシャルの経済学を継ぎ足したのだとすれば、ラスキンはターナーやゴチック建築論からなる美の哲学に、カーライル流の経済学批判を継ぎ足した思想家であるといえる。高橋先生の『経済思想史随筆』所収の論文「アリストテレスと経済学」には次のように書かれている。「アリストテレス及びギリシア哲学者の経済学説は、古典的経済学者によって閉却せられることが大であっただけ、其れだけ一部の反動的経済思想家の上に深甚なる影響を及ぼした。第十九世紀の後半に至って、一部人士の間には、強烈なる勢いを以ってギリシア思想が蘇った」（高橋 1940, p.73）。高橋先生がここで「反動的経済思想家」として具体的に誰を念頭においていたのかは、必ずしもこの文面だけからでは明らかではない。しかし一九世紀後半のイギリスにおいて、ロマン主義哲学によってリカードやミルに代表される同時代の古典経済学を批判した思想家として、まず挙げられるのは、「労働とは誰もが所有する基本的権利である」という観点から「労働価値説」そのものを強化しようとしたカーライルである。そしてさらにより強力な理論家として挙げられるべきなのが、カーライルを思想上の「父」として崇めるとともに、古代ギリシアの経済思想（といってもアリストテレスよりもむしろクセノポンの『経済学』とプラトンの『国家』や『法律』の思想）を援用することで、高名な美術評論家としての名声を捨てることも恐れずに、この立場をより本格的な理論へと高めようとしたジョン・ラスキンである。

ラスキンは『この最後の者にも』『ムネラ・プルヴェリス』などの著作を通じて、自分の時代のポリティカル・エコノミーの概念を批判して、むしろ古代ギリシアにおけるこの言葉の意味を復活さ

(3) ライプニッツ思想と西洋近代における資本主義の勃興との関係については Elster 1975 が参考になる。ライプニッツの多面的な知的業績の全貌は佐々木 2002 によってうかがうことができる。

せるべきであると説いた。この復古的な発想は表面的には明らかにアナクロニスティックで保守的、反動的なものである。しかし、彼のプラトンを利用したミルなどの批判が、(二一世紀に生きる今日のわれわれの目から見て) 単に反動的なものとして片付けられるものであったのかどうか。ここではラスキンの複雑な思想を細かく点検することはできないが、ごく簡単に彼のプラトンなどの古典的思想の利用を見ることで、一般にアリストテレスと比較しても「反動的」といわれることの多いプラトン思想でさえ、単に反動的な役割のみを果たしたわけではない、ということを確認してみたいと思う。

ラスキンの経済思想は一言でいえば、社会全体の「富」を、その構成メンバーの道徳的品位の向上への貢献の如何によって測ろうという、ロマン主義的、有機的社会思想である。彼にとっては社会と家族とは直接に同一の存在であり、経済的価値は「生産の量」ではなく、「労働と消費の質」によって評価される。「生以外に価値といえるものはない」というのが彼の基本的立場であり、その立場から「きれいな水と空気」の社会、「風景と環境」を重視した生産労働と消費の社会が求められる。ラスキンの同時代人ミルは、アダム・スミスからリカード、マルサスへと至る古典的経済学の歴史に、ベンサムと父のジョン・ミルの功利主義の哲学を重ねることで、ポリティカル・エコノミーという学問を科学的に整備すると同時に、その背景となる価値論を構築しようとした。彼は『ポリティカル・エコノミーの原理』(1871年)その他の著作で、経済的価値とは「修飾語なしで用いるなら、常に交換価値のこと」であり、したがって富とは「交換価値を有するすべての有用にして快適なもののことである」と定義した。ラスキンはこのような交換価値という意味での富が必ずしも「生という富」に直結したものではないことを指摘するとともに、そうした富を生成させる主体としての「経済的人間」という概念の重視そのものが、無意味な抽象概念として無意味であるに留まらず、道徳的に劣悪であるような社会の形成へと導くと批判した。この批判において活用されるのが、クセノポンやプラトンの「価値」の思想なのである。⁽⁴⁾

ラスキンの主要な経済学批判のテキストとしては、『藝術経済論』『この最後の者にも』『ムネラ・プルヴェリス』などがあるが、ここではまず代表作の『この最後の者にも——ポリティカル・エコノミーの基本原則にかんする四論文』の内容を一通りスケッチして、彼の議論のスタイルに触れておき、その上でこの批判の背後にある価値論について見ることにしよう。この作品は四論文からなるが、作品全体の主張は以下のように、「抽象的人間像の批判」から「名誉ある富」の主張へ、そして「富の分配における正義の強調」から「価値の定義」へ、という順番で展開する。

(4) ラスキンのテキストについてはウィルマー編集のペンギン・クラシックス版 (Ruskin 1985) が簡便で利用しやすい。ラスキンの古典的経済学の批判については、彼自身が帝国主義的交易システムの独創的批判者としてレーニンなどにも影響を与えた異色の経済学者ホブソンの論文 (Hobson 1920) が参考になる。また、Fain 1956 や Sherburne 1972 のラスキン研究も、当時の経済学理論とラスキンの思想との関係にかんして詳しい解説を与えている。

第一論文「榮譽の根源」は、標準的なポリティカル・エコノミーにおける「個人の利益を追求する経済的人間 (economic man)」というモデルの抽象性を批判する。ラスキンによれば、この概念の設定は、「社会問題におけるさまざまな攪乱要因が、検討の対象となっている者の本質を変形する」ことを無視しているために、誤っているだけでなく有害である。人間の理解のためにその骨格だけを調べようとしても、発展するのは骨格理論だけであろう。

標準的なポリティカル・エコノミーにおいて人間の利己的関心にのみ焦点を合わせるという方策は、人間論としてのモラル・サイエンスにとって一面的な人間理解であることは十分に承知されながらも、科学としての経済学が自立するために必要不可欠な抽象として、理論的観点から積極的に容認されてきた。たとえばミルは、「ポリティカル・エコノミーの定義、ならびにそれに適した探求方法について」という初期の重要な論文のなかで、経済的人間とは、「現存する知識をもとに、最小量の労働と自己否定によって得られるような、最大量の必需品、便宜、贅沢を手に入れるよう、必ず行動する者」であると定義し、こうした人間のモデルを設定することは、関心をもった人間どうしが富を得ることができるような市場における諸法則を見つけようとする「科学が、必然的に前進するために取るべき様式である」と書いている。

ラスキンがまず注意を促すのは、ポリティカル・エコノミーがこの種の抽象によって、社会の内なる人間の行動の意味を極度に単純化し、算術化するために、雇用者と被雇用者の間の労使関係という「そのもっとも重要な主題」を扱うことができない、ということである。労働関係を複数の利益の交換の連関から演繹することはできない。なぜなら、人間の生はもっとずっと複雑なものに作られており、人間社会のメカニズムをその攪乱要因の働きの強さという点から見れば、利己的関心よりも愛情がより重大であり、したがって、社会の理解にとっては協力の理解のほうが競争の理解よりも重要であるからである。とはいえ、もちろん愛情だけが働いて競争が働いていないという訳ではない。そのために重要になるのが賃金の「公正な」決定である。この公正さは、職業の種類に従って決定されるのではなく、その労働の質によって決定されなければならない。正義は何よりも賃金という形で顕在化する富の分配にかんして問われるべきである。ところが、算術的に明快な仕方であまり利己的関心の追求によって社会の変化を記述することは、その記述自体が、社会のあるべき姿を模範として示し、推奨するという実践的な効果をもつ。学問のための算術的抽象化は、自然科学とは異なって社会を相手にするモラル・サイエンスにあっては、単なる事象の単純化の手段に留まることはなく、「あるべき姿」の提示というプーメラン的な実践的意味をもたざるをえない。そのために、「経済的人間」という一次元的理解がもつ単純さという魅力が、社会そのものの進むべき方向を示唆するという誤った効果をもたらすのである。

第二論文「富の鉞脈」は、富 (wealth) と名誉 (honor) との関係の分析に当てる。オーソドックスな経済理論では富の意味はすでに既知のものとされている。しかしながら、経済理論があるべき本来のポリティカル・エコノミー (クセノポンがいうところの、ポリス (国家) をオイコス (家) と見

て、その健全な維持を計る術)となるためには、「富裕になること (getting rich)」を主題とする科学としての“mercantile economy”と袂を分つ必要がある。富裕であるとは「権力をもつこと」であり、その成立の条件として、富裕な者が権力を行使すべき対象としての貧しい者の存在を必要としている。ラスキンはこの貧者を許容し、場合によっては必要とさえする富裕という現象の容認が、人間の共同体への従属という本質を捨象した、個人主義という哲学に由来すると考える。個人主義は専制的抑圧への批判の意味をもつとしても、経済学においては別の視点から評価されている。それは、個人個人の自己利益の追求が自然に社会全体の「調和」に至るという、利己的追求を軸にした社会の自己調整能力(「見えざる手」)にたいする盲目的信頼を形成する。しかしこの信頼は論理的な可能性への信頼であるだけであって、現実の実現可能性のための根拠を欠いている。そのためにこの信頼は希望的であるばかりでなく、自己欺瞞的でさえある。「市場における富の交換」という便宜が、市場の自己調整への幻想を生み、それは合理的調整への信頼というかけ声のもとで貧者への権力の行使の黙認を伴うであろう。富の主体が個人でなく社会にあるならば、社会における貧困とそれに伴う生の劣化の蔓延が無視されてはならない。社会がもつ本来の富の減少を帰結する商業的経済学の対立軸として、社会を一つの家族とみなし、その全体の生存と繁栄を図ろうとする「名誉ある富」の科学が構想される必要があるはずである。

第三論文「地上を裁く者」は、第一論文で触れられた「公正さ」の問題、「正義」を基準にした労働や貨幣の問題を扱う。「正当なる価格とは人類がそれに費やした生産労働の価格である」。ラスキンはこのスミス以来の労働価値説を独自に解釈することによって、リカードの理論を批判できると考える。彼の理解では、リカードは表面的には労働価値説を採用しながらも、この原則が成立するのは資本構成と資本耐久性が一定の場合にのみ限られるとしたために、実質的にこの原則を市場の原理に従属させてしまっている。さらに労働力についても土地と同じような収穫逓減の法則が成り立つとするとともに、市場での賃金は人口との関係で常に最低生存賃金へ収束すると認めることで、労働価値という概念そのものを完全に空洞化している。労働、とくに「もの作り」の労働の価値は、本来その労働に「内在的に」属するものであり、「個々の実体もつ個別の引力と同じように、固定され実質的なものである」。ベンサムやミルの功利主義によれば、人間の行動の「効用」は、その行動が生み出す幸福の量の問題に帰着するが、この種の帰結主義は正義や公正さを快樂という別のもので置き換えている。生産される物の価値はそれを生み出す労働の価値と内在的に結びついたものであり、その正当な値は芸術の価値と同じようにまったく直観的に判断される。交換の価値ではなくもの作りの価値に重きをおくことで、労働を主軸においた富の生産と分配とのより調和のとれた考え方が生じるようになる。逆に、もの作りの価値を評価せず、それがもたらす快樂のみで決定される労賃の支払いは、製作者の労働の価値を無視しているという意味で、一種の窃盗行為である。掘り起こされねばならないのは、生産の経済学と消費の経済学を直結させるような、労働者＝消費者の視点から見た経済活動という発想である。

第四論文「価値に従って」は、作品全体を締めくくる形で、以上の富と公正さの議論から導かれる「価値」一般についての考えを提示する。ここでの批判の具体的対象は、ミルの「非生産的労働 (unproductive labour)」と「生産的労働」との区別であり、さらには、リカードの『ポリティカル・エコノミーと課税の原理』に見られる「交換価値と効用と需要」をめぐる分析である。ミルは、アダム・スミス以来の商業的交換価値と道徳的価値にかんする比較論を批判的に踏襲して、ものの価値とはその効用という意味での生産性のみに一元的にかかわるとした。しかし、ミルの実際の例では、「鋼鉄製のフォークのほうが銀製のフォークよりも優れている」というような、あいまいな比較が多数見られ、「生産的」な価値とは何かがまったく不明瞭なままである。ミルは富とは所有とその使用のことであると考えたが、ラスキンによれば、所有が使用に転じるためには権力が介在し、その権力の行使には正しいものと正しくないものがあるために、単純な功利性の原理の一元的な適用はできない。富の使用は貧しい者の搾取や支配という帰結をもたらす可能性をもつが、それは富者が銀製のフォークを貧しい者に作らせるからではまったくなく、芸術的に優れた銀製品の価値を評価できず、その労働に正当な賃金を支払わないからである。「すべての物がすべての者に行き渡るべきであるが、しかしそれは、正しい物が正しい者に届く限りにおいてである」。さらに、リカードは、「商品の交換における需要は効用によって決定され、需要が一定であればその価格は、それを生産する労働量によって決定される」としているが、この考えは、効用という帰結や結果によって需要が決定されるという前提そのものにおいて誤っている。需要はそれを求める者の「志向 (intention)」にもとづいて決定されており、労働もまたそれを作る者の「志向」と密接にかかわっている。価値が問われるのはつねに、作られたものの内在的な質であるとともに、それを作り、それを使用しようとする者の志向的意識である。ものの生産と交換、貯蔵と使用にかんする科学は、この志向的意識として現れる価値の次元、言い換えれば人格的な価値の次元に焦点を合わせる必要がある。

以上の反省から、公正さと正義と社会的協働を基礎にする新しい富の定義が生まれる。すなわち、「生なくしては富は存在しない。生というのは、そのなかに愛の力、歓喜の力、讃美の力のすべてを包含するものである。もっとも富裕な国というのは最大多数の高潔にして幸福な人間を養う国、もっとも富裕な人というのは自分自身の生の機能を極限まで完成させ、その人格と所有物の両方によって、他人の生の上にももっとも広く役立つ影響力をもっている人を用いるのである」。結局この議論によれば、功利主義の「最大多数の最大幸福」の原理は、「最大多数の高潔にして幸福な人間」の原理に代わられる必要があるというのである――。

さて、以上のようなラスキンの反時代的な思想は、発表当時のイギリスの読者に猛烈な拒否反応を引き起こし、「素人のたわごと」という共通の意見とともに無視されることになったが、不思議なことに時代の推移とともに徐々に評価を高めていき、二〇世紀初頭には大きな影響力をもつようになった。たとえば一九〇六年、イギリスの労働党がラスキンの弟子のモリスらによって設立されたとき、この書物は一種のマニフェストとして扱われた。また、ガンジーは自伝で、この書物こそ「自

分の人生を決定した唯一のもの」といい、トルストイも決定的な影響を証言している。これらの反応はある意味で、富を社会的正義に還元し、正義を正しい労働とその評価に還元し、さらに正しい労働を優れた作品の製作へと還元しようとした、ラスキンの思想がもっている社会主義その他の政治的、社会的思想との親近性がもたらしたものといえよう。

しかしながら、彼の思想は現代の視点からみると、こうした社会主義的政治理論としての特徴よりも、むしろそれが依拠するプラトンの『国家』の価値論にたいするある種の変形において、意味ある経済学のモデルを提供しているかもしれないという点が、重要であると思われる。それは別の角度からいうと、効用のような帰結主義的価値論ではなく、事物や労働の内在的な価値にもとづく理論であっても、単なる思弁に終わらずに、何らかの実践的指針を導くことができるのかという問題についての、プラトン主義に立ったラスキンなりの解答の可能性ということである。このことを最後に指摘して、このアナクロニスティックな理論の意義を確認しておきたい。

周知のようにプラトンにとっては、あらゆる人間の判断に登場する無数の概念は、究極的には「善」のアイデアに結びつくことで意味をもつ。この善のアイデアは、純化した哲学の見地からいえばソクラテス的な哲学的吟味の徹底においてかろうじて到達可能であるような、我々の日常性と断絶したアイデア界に存する超越的価値であり、あくまでも理知的な観照の対象となるものである。徳や幸福などからなる価値とは、理知的な判断によって把握される善のアイデアのもとでのみ真の価値となるとされている。

とはいえ、プラトンは一方で、社会の構成の原理が人間の魂の構成の原理と完全に同形であると解釈し、イデア的なものと通低する理知的なものが、単に超越的な世界においてのみ把握されるだけではなく、社会においても追及されるべきであるとする。人間の魂には「理知的部分」と「気概的部分」と「欲望的部分」の三つの機能が備わっている。この機能の強弱によって、人々は知を求める人間（哲学者）と名誉を求める人間（軍人）と金銭を求める人間（商人、職人）に大きく三分される。個人の心においてこうした素質はそれぞれに暴走しようとする傾向を秘めているが、全体として三者が一定の調和のもとに保たれているときには健全な状態にある。同様に、社会はこうした素質からなる多様な人間がそれぞれの傾向に従って調和ある平衡を保っているならば健全である。しかしながら、人間の心の健康がつねに理知的部分によって反省的に吟味されていなければならないように、社会もまた内的外的動因による平衡の崩壊に対処するために、「統治者」を必要とする。この統治者の理想は、善のアイデアという究極的価値を体得した人間、いわゆる「哲人王」である。とはいえ、これはあくまでも理想であり、現実の問題としてまず必要になるのは、適切な能力を備えた人材が社会の「守護者」となることである。守護者はポリスを外敵から守る軍人たちと、内的な秩序の調整を司る統治者とからなる。哲人王はこの統治者の理想型であり、現実の社会においてまず必要となるのは、さまざまなタイプの守護者の教育と訓練である。国家が正義によって統治されるためには、守護者の規律が厳格に守られなければならない。彼等には財産の私有を法律により厳

重に禁止して、支配の地位と富とが相容れないようにしなければならず、権力をもつことによって富を失うようにしなければならない。彼等は家庭をもつことさえ禁じられる。こうした禁止は人々にとって好ましいものではないから、守護者となろうと欲する人は少ないであろう。それゆえ、優れた人々にたいするこうした役割の付与は、一定期間の義務として強制的に課せられるのでなければならない——。

プラトンのこの社会の理論はしばしば社会主義や共産主義、場合によっては全体主義になぞらえられることもあるが、ここではその是非を問う必要はない。より重要な問題は、ラスキンがこの思想から当時のポリティカル・エコノミーにたいする批判のための多くのヒントを得つつも、いくつかの重要な変更を加えることで、そこに新しい意義を与えようとしている点である。古代ギリシアの経済思想を活用しようとする彼の議論は多岐にわたっているが、現代の視点から見てとくに注目されるのは、次の二点のようなユニークな発想である。

1) 幸福や価値を構成する本質的要素として、「快」とともに「理知的なもの」を認めること。

これはミルのような功利主義と対決するためにラスキンが採用する基本的な価値論であるが、彼はこれを「富」の分析に応用する際に、クセノフォンの家族的、共同体的経済思想を適用して、次のようなひねりを加える。クセノフォンの考えでは、「富」とは「勇敢な人による価値あるものの所有」として定義されるが、ラスキンは価値一般、あるいは商品の「交換価値」もこの基準から導かれると主張する。国家にかんしても個人にかんしてもその富はものの価値 (value) とそれを所有する者の勇気 (valor) がともに評価されなければならない。勇気とは慣習的な常識のもとで利己的利益を追求するのではなく、知的な能力を大胆に発揮できることであり、プラトンの理論を踏襲すれば、統治者となるべき哲学者、軍人両方の資質を意味することになるが、ラスキンはこれに加えて、古代では欲望と消費のみかかわるとされた商人や職人にも、同様の知的、技術的、芸術的勇気という資質を帰する。富の「代数的価値」は財産の価値を x 、所有の知能を y とすれば、 xy で表され、 x と y のいずれか一方でも 0 であれば、その値も 0 である。任意のものの交換価値は (1) その生産費用、(2) 費用により決定される量、(3) それを欲する人の数と力、(4) その望ましさにたいする評価、という四つの変数によって決定されるが、これらの (1)(2) は x に帰着し、(3)(4) は y に帰着するので、結局商品や生産物をめぐるさまざまな価値は、 xy という同じ「富」の視点で統一的に理解されなければならない、とされるのである。

2) 「経済理論家」をまさしくプラトンのいう「守護者」として考えようとする発想。

ラスキンの理解する本来のポリティカル・エコノミーは、社会の健全性という意味での富を増大するための学問であるが、この健全性の意味がプラトンの時代と彼の時代とは異なっている。プラトンが『国家』で問題にしたのは、権力をもつ者が富裕になるとともに道徳的に墮落しているということである。プラトンにとって、富裕が不正義を生むというのは、権力者の精神の墮落を通じてさまざまな権力の濫用がはびこり、富の偏在と不正な取引の横行が避けられないということである。

これにたいして、ラスキンが問題にする不正義は、ありあまる経済的富が貧困な労働条件下の生産によって支えられているという現状であり、この現状の結果として社会全体が病み、労働条件がますます悪質なものとなるとともに、そこから生まれる生産物の質が徐々に劣化していくということである。守護者は社会の物質的基盤の「稀少性」を管理するのではなく、富裕層における無意味で質的に劣悪な「贅沢」の氾濫に監視の目を光らせる必要がある。それと同時に、貧困による生活環境の劣化を防ぐために、人間の生存の条件について十分な知識と包括的な注意とが必要とされる。行き過ぎた奢侈へのブレーキと生活環境の整備のための注視こそが、新しい時代の守護者の使命であり、ラスキンはそれが為政者へのコンサルタントとしての経済学者の本来の任務であると考えたのである。

知的かつ芸術的な価値としての富の増大、それを生み出す環境としての「きれいな水と空気」の重要性の主張、そして、大気汚染などがきっかけとなって自然全体の規模での異常気象を招くかもしれないという鋭い警鐘——ラスキンが最終的に守護者に求めるようにするのは、古来の政治的正義と結びついた「社会倫理」の確立であるよりも、「風景の倫理」の提唱であった。彼は一八八四年、ロンドン協会において講演「一九世紀の嵐雲」を発表し、さまざまな産業構造の発展が大規模な気候変動と結びついて、人類の将来の生存を脅かすかもしれないという、今日からみるとあまりにも的確で予言的な議論を展開しているが、そうした問題を科学的に問うていく理論家の役割こそ、経済学者に求められるべき「守護者」経済学者の役割であった。

「生産の真の試金石は消費の方法と結果である。生産というのは苦勞してものをつくることではなく、有益に消費されるものをつくることである。そして国家の問題は国家がどれだけ多くの労働を雇用するかということではなく、どれだけ多くの生をつくりだすかということである。なぜかといえば、消費が生産の目的であり標的であるように、生が消費の目的であり標的であるからである。……

それゆえ、空気を浄化すべき最大限の森林と緑草によって太陽の酷熱から保護し、流れに水を供給すべき傾斜地がなければならない。全イングランドは、そうしようと思えば、一つの工場都市となることもできるであろう。またイングランド人は、人類全体の福祉のためにみずから犠牲となって、喧騒と暗黒と致命的な悪気のまっただなかで、細りゆく人生を送ることもできるであろう。しかし世界中が工場となることもできなければ、鉱山となることもできない。いくら器用であっても鉄によって万人を養うこともできず、水素でもってぶどう酒の代用をすることもできない」(ラスキン 2008, p.158ff)。

これは『この最後の者にも』の末尾のほうの文章である。結局、生という意味での富を増大させるべく生産と消費の調整を図る者——これがラスキンが来るべき経済学者に求めた守護者としての任務であった。恐らく彼のイメージした経済学は、現代の言葉でいえば「厚生経済学」であり、さらには「ディープ・エコノミー」ともいべき新種の発想であったといえるかもしれない。それは通貨や金融にかんする観点を完全に欠落しているために、さまざまな財がもつ市場における効用の均

衡や、分業を通じた生産の市場的調整の理論を与えることができない。それは自由な個人が土地と世襲制度から解放されて、自力で資産を築き、さまざまな投資を企てるという資本主義の根本的な人間論的前提を等閑視しているために、資本主義の内在的な批判とはなっていない。とはいえ、経済的成長という観点から測られる国家単位の金融、財政的側面の分析はできなかったとしても、共同体全体が巻き込まれる生産システムの矛盾と危険性について、よりグローバルな視点から警鐘を鳴らす以上のような洞察は、資源においても労働にかんしても、人類の存続を保障する環境という視点をはずして考察することのできない今日のわれわれにとっては、「素人のたわごと」して無視できるものではないであろう。少なくともラスキンのような「反動的」思想家もまた、ヴィクトリア朝イングランドの大規模な産業興隆のただなかで、高橋先生のいわれる「凡そ天下国家を治むる」という意味でのポリティカル・エコノミーの使命を考察した思想家としては、一人の独創的な理論家であったといえるのではないかと思われるのである。

(京都大学大学院文学研究科教授)

文 献 表

- Couturat, Louis 1901 *La Logique de Leibniz d'après des documents inédits*, Alcan.
Elster, Jon 1975 *Leibniz et la formation de l'esprit capitaliste*, Aubier Monataigne.
Fain, John Tyree 1956 *Ruskin and the Economists*, Vanderbilt University Press.
Hacking, Ian 1975 *The Emergence of Probability*, Cambridge University Press.
Hobson, John 1920 "Ruskin as a Political Economist", in J. Howard Whitehouse, ed., *Ruskin the Prophet*, George Allen and Unwin.
伊藤邦武 1999『ケインズの哲学』岩波書店。
Keynes, John Maynard 1921 *A Treatise of Probability*, Macmillan.
ライブニッツ 1975『人間知性新論』谷川多佳子他訳、「ライブニッツ著作集」第五巻, 工作社。
Rescher, Nicholas 1995 *Essays in the History of Philosophy*, Ch.12 "Leibniz, Keynes, and the Rabbis on a Problem of Distributive Justice", Avebury.
ラスキン 2008『この最後の者にも』飯塚一郎訳, 中公クラシックス。
Ruskin, John 1985 *Unto this Last, and Other Writings*, Clive Wilmer, ed., Penguin Classics.
Russell, Bertrand 1900 *A Critical Exposition of Leibniz's Philosophy*, Cambridge University Press.
佐々木能章 2002『ライブニッツ術』工作社。
Sherburne, James Clark 1972 *John Ruskin and the Ambiguities of Abundance: A Study in Social and Economic Criticism*, Harvard University Press.
高橋誠一郎 1940『経済思想史随筆』理想社。